

1. はじめに 日本語文法とは何か

アメリカで外国人に日本語を教えていたとき、アメリカ人の学生から「お湯を沸かす」は、どうして「水を沸かす」ではないのですか、と質問されました。「水を沸かす」は英語の boil water の訳ですが、確かに沸かすのは水だから、「水を沸かす」が論理的です。お湯をさらに沸かしたら、沸騰して蒸発してしまいますから。そのときは、習慣的に「お湯を沸かす」というからそのまま覚えるしかないとか説明できませんでした。その後、何とか説得力のある説明はできないものかと考えて、次のように説明することになりました。

一般的には、「N(名詞)をV(動詞)する」といえば、「りんごを食べる」「紙を切る」のように動詞の表す動作Vがその目的語の名詞Nに目に見えた影響を及ぼします。たとえば、「食べる」「食べる」動作によって「りんご」の形が変わります。これに当てはめれば、「水を沸かす」が、「沸かす」ことによって「水」の温度が変わり、蒸発するので正しいことになります。しかし、「お湯を沸かす」の場合は、沸かした結果お湯になるわけで、Vの動作の結果がNの位置にくる、つまり「NをVする」で「Vした結果Nになる」という意味を持つ日本語特有の簡潔表現といえます。「ご飯を炊く」も、ご飯をさらに炊いたら、おかげになってしまいますので、「米を炊く」が一般的には正しいのですが、これも、「(米を)炊いた結果ご飯になる」の簡潔表現です。「ホームランを打つ」(ボールを打った結果、ホームランになる)も同様です。

日本人がふだん当たり前のように使っている「お湯を沸かす」に対して疑

問を持つのは、外国人が日本語を外国語として見ているからです。この章では、日本語を外国語として扱う、外国人のための日本語文法を紹介します。第7章の国文法とは全く違うわかりやすい文法です。

たとえば、国文法では、「です」と「ます」と「ます」はどちらも丁寧語として扱われているだけです。日本語文法では、「です」は「学校です」「白いです」「静かです」のように名詞・形容詞(イ形容詞といいますが)・形容動詞(ナ形容詞といいますが)に付くのに対し、「ます」は「行きます」「見ます」のように動詞に付く、と説明します。このように、実際に使われる形にもとづいて、いるのが、日本語文法の特徴です。

さて、国文法と日本語文法では、品詞の呼び名が少し違います。次の表1は、国文法と日本語文法における品詞の呼び名を対照させたものです。

表1 国文法と日本語文法の品詞の対照

国文法	日本語文法	英文法
名詞	名詞	Nouns
形容詞	イ形容詞	Adjectives
形容動詞	ナ形容詞	Adjectives
連体詞	連体詞	Adjectives
動詞	動詞	Verbs
副詞	副詞	Adverbs
接続詞	接続詞	Conjunctions
感動詞	間投詞	Interjections
助詞	助詞	{Prepositions}
助動詞	—	—

英文法の Adjectives の文法的機能は名詞を修飾することですので、国文法の形容詞(「白い花」など)、形容動詞(「静かな家」など)、連体詞(「小さな家」など)がそれに対応しています。日本語文法では、国文法の形容詞・形容動詞をイ形容詞・ナ形容詞といいます。日本語文法では助動詞という品詞を立てていません。複雑すぎるからです。では、名詞・形容詞・連体詞・副詞・動詞の順で解説します。

2. 名詞

名詞は、表す対象によって次のように分けられます。

(1) 名詞の分類

表す対象

例

- | | | | |
|--------------|----|-----|-----|
| ①ものを表す | 本 | 机 | 鉛筆 |
| ②人を表す | 学生 | 先生 | 太郎君 |
| ③場所を表す | 教室 | 駅 | 海 |
| ④動作を表す | 勉強 | けんか | |
| ⑤抽象的なものごとを表す | 規則 | 権利 | |

日本語には、「こ・そ・あ・ど」で示される指示代名詞があります。

(2) こそあどことば

指示対象	もの	場所	方向	方法
近称	これ	ここ	こちら	こう
中称	それ	そこ	そちら	そう
遠称	あれ	あそこ	あちら	ああ
不定称	どれ	どこ	どちら	どう

近称の「これ」は話し手の近くにあるものを指しますが、中称の「それ」と遠称の「あれ」の境界線はあいまいです。それよりも、日本語教育ではまず、「これ」と「それ」の区別を教えます。「これ」は話し手のそばにあるものを指し、「それ」は話し手から見えて、聞き手のそばにあるものを指すときに使われます。「あれ」は話し手からも聞き手からも遠いものを指すときに使われます。

3. 形容詞

国文法では形容詞、形容動詞という術語を使っていますが、日本語文法ではそれぞれをイ形容詞、ナ形容詞といいます。これは、「赤い本」「静かな部屋」のように連体形がそれぞれ「い」、「な」で終わるからです。形式をそのまま品詞名にしたほうがわかりやすいですね。次にその例を挙げます。

(3) イ形容詞・ナ形容詞の例

イ形容詞 速い 遅い 青い 赤い 白い
 ナ形容詞 静かな にぎやかな 元気な きれいな

ナ形容詞の「きれいな」は語幹が「きれい」と「い」で終わるので、イ形容詞とまちがわれることがあります。この場合、イ形容詞とナ形容詞は連体形によって区別されますので、「*きれいな人」とはいえず、「きれいな人」といえるからナ形容詞である、と説明します。

形容詞は、国文法の活用表とは違って、次のような変化表になります。

表2 イ形容詞、ナ形容詞の変化表

イ形容詞	普通形 (plain form)		丁寧形 (polite form)	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形
現在形	白い	白くない	白いです	白くありません
過去形	白かった	白くなかった	白かったです	白くありませんでした
ナ形容詞	現在形	静かだ	静かじゃない	静かじゃありません
	過去形	静かだった	静かじゃなかった	静かじゃありませんでした

変化表は大きく普通形 (plain form) と丁寧形 (polite form) に分かれます。普通形は、名詞修飾 (noun modification) の文や引用の文を作るのに必要です。

(4) 名詞修飾の文

京都で取った写真 顔の白くない人 (傍線部は普通形)
 *京都で取りました写真 *顔の白くありません人 (傍線部は丁寧形)

(5) 引用の文

この部屋は静かじゃないと思います。(傍線部は普通形)
 *この部屋は静かじゃありませんと思います。(傍線部は丁寧形)
 太郎は、彼女の顔は白かったと思います。(傍線部は普通形)
 *太郎は、彼女の顔は白かったですと思います。(傍線部は丁寧形)

普通形と丁寧形はそれぞれ肯定形 (affirmative form) と否定形 (negative form) に分かれます。これによって、普通体・丁寧体の肯定文・否定文が作れるよ

うになります。さらに、この四つの形には現在形 (present form) と過去形 (past form) があります。これによって、現在の出来事だけでなく、過去の出来事も表現できるようになります。表2の活用はとも実用的といえるでしょう。

なお、次のようにイ形容詞、ナ形容詞の両方の形を持つ語もあります。
(6) イ形容詞、ナ形容詞の両方の形を持つ語

やわらかい／な こまかい／な あたたかい／な

これらは限られた数しかありませんので、そのまま覚えさせます。

4. 連体詞

「いわゆる」「あらゆる」など、名詞を修飾する語を連体詞といいます。
(7) いわゆる知識人。あらゆる本。

国文法では、「小さな」、「大きな」も連体詞に含めましたが(第7章3.6「連体詞」を参照)、日本語文法では、これらは、「小さい／な(人)」、「大きい／な(人)」というように、イ形容詞のもう一つの連体形として扱います。

5. 副詞

副詞は述語となる語である動詞・イ形容詞・ナ形容詞、さらに他の副詞も修飾します。副詞には「ゆっくり」「少し」などがあります。
(8) 太郎はゆっくり走った。
(9) ここは少し静かだ。
(10) 少しゆっくり話してください。

(8)の「ゆっくり」は「走った」を、(9)の「少し」は「静かだ」を修飾しています。(10)の「少し」は「ゆっくり」という副詞を修飾しています。

ここで、修飾についてまとめましょう。修飾には名詞修飾と述語修飾があります。

(11) 名詞修飾の例

修飾する語 例

- ①名詞+の ぼくの本
 ②イ形容詞 白い花
 ③ナ形容詞 静かな部屋
 ④動詞 きのう買った本
 ⑤副詞 もっと右
 ⑥連体詞 あらゆる本 この本 こんな本

品詞にかかわらず、名詞にかかっていく例はみな同じ名詞修飾として扱います。

(12) 述語修飾の例

修飾する語 例

- ①名詞+「が、を、に、へ、で、まで」
 太郎が走った。本を読む。太郎にあげる。学校へ行く。
 ②イ形容詞 新しく作る。
 ③ナ形容詞 きれいに作る。
 ④動詞 急いで作る。
 ⑤副詞 ゆっくり作る。

品詞や、主語・目的語などの文の役割にかかわらず、述語にかかっていく例はみな同じ述語修飾として扱います。

6. 動詞

動詞は、日本語文法の根幹をなす品詞です。まず変化と活用の種類について述べ、続いて各種活用形の作り方を説明し、さらに動詞にかかわるテンスとアスペクトについて解説します。最後に、やりもらい、動詞の導入の仕方を紹介します。

6.1 変化

動詞も形容詞と同じく次のような変化表になります。

表3 動詞の変化表

	普通形		丁寧形	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形
現在形	食べる	食べない	食べます	食べません
過去形	食べた	食べなかった	食べました	食べませんでした

6.2 活用の種類

国文法では五つの活用の種類がありました。日本語文法では、日本語をローマ字で表記することによって次の三つの活用の種類に分けます。

(13) 日本語文法における動詞の活用の種類

活用の種類 定義 例

u 動詞	語尾が -u で終わる動詞	hanas-u (話す) kik-u (聞く)
ru 動詞	語尾が -ru で終わる動詞	mi-ru (見る) tabe-ru (食べる)
不規則動詞	語尾は -ru で終わるが、 テ形の語幹が異なる	ku-ru (来る) su-ru (する)

u 動詞 (u-verb) は、国文法の五段活用動詞にあたります。国文法と違うのは語幹です。語幹とは、どの活用形にも共通の変わらない部分です。国文法ではひらがな書きですから、たとえば、「話す」の場合、「はな(話)」までが語幹になりますが、日本語文法ではローマ字書きですから hanas-までが語幹になります。ru 動詞 (ru-verb) は国文法の一段活用動詞にあたります。語幹は「見る」の場合は mi-、「食べる」の場合は tabe- です。u 動詞の語幹は、hanas-、kik- のように子音で終わるのに対し、ru 動詞の語幹は mi-、tabe- のように母音で終わります。不規則動詞 (irregular verb) の「来る」(ku-ru)、「する」(su-ru) も語尾に -ru が付きますから、ru 動詞に含めたいのですが、テ形にすると「来て」(ki-te)、「して」(si-te) のように ku-, su- が ki-, si- に変わってしまいますので、不規則動詞とします。一方 ru 動詞は、mi-ru、tabe-ru をテ形 mi-te、tabe-te にしても語幹は変わりません。

う() 動詞のテ形の作り方を紹介します。

6.3 テ形の作り方

動詞のテ形 (te form) が作れるようになると、人に何かを頼む「～てください」や、自分の欲求を表す「～てほしい」などの表現ができるようになります。また、「～ている」(進行)、「～てしまう」(完了)などのアスペクト(6.10参照)も表せるようになります。

(14) テ形の作り方

u 動詞	テ形	覚え方
会う・立つ・取る	会って・立って・取って	うつる→って
読む・呼ぶ・死ぬ	読んで・呼んで・死んで	むぶぬ→んで
書く・急ぐ	書いて・急いで	くぐ→いで
話す	話して	す→して

覚え方で「うつつるって」とは、u 動詞の終止形が「う」「つ」「る」で終わるときはテ形が「って」になることを表します。「むぶぬんで」「くぐいで」「すして」も同様です。ただし、u 動詞の中で「行く」だけはテ形が「行って」になる例外で、そのまま覚えられます。ru 動詞の場合は「見る」「食べる」が「見て」「食べて」になるように、「る」を「て」に変えるだけです。不規則動詞は二つしかないので、「来る→来て」「する→して」と覚えます。

テ形の「て」を「た」に変えればタ形(過去形)になり、過去のできごとが言い表せるようになります。

6.4 仮定形の作り方

仮定形 (conditional form) は、動詞の語尾 -u を -e に変えて ba をつけることによってできます。この規則はどの種類の動詞にも当てはまります。

(15) 仮定形の作り方

u 動詞	nom-u → nom-eba (飲む→飲めば)、hanas-u → hanas-eba (話す→話せば)
ru 動詞	mi-ru → mi-r-eba (見る→見れば)、tabe-ru → tabe-eba (食べる→食べれば)

不規則動詞 ku-ru → ku-reba (来る→来れば)、su-ru → su-reba (する→すれば) 仮定形を使った文を挙げます。

(16) この薬を飲めば、すぐなおりますよ。

仮定形を導入したあとには、「～ばいい」「～ばいいんです」という構文も教えることができます。

(17) A かぜをひいたときは、どうすればいいでしょうか。

B 薬をのめばいいんです。

6.5 可能形の作り方

可能形 (potential form) は、u 動詞の場合、語尾の -u を -e に変えて -ru をつけることによってできます。ru 動詞の場合、語幹に rareru をつけます。不規則動詞「来る」は「来られる」、「する」は「できる」になります。可能形はすべて ru 動詞になります。

(18) 可能形の作り方

u 動詞	yom-u → yom-eru (読む→読める)、isog-u → isog-eru (急ぐ→急げる)
ru 動詞	mi-ru → mi-rareru (見る→見られる)、ki-ru → ki-rareru (着る→着られる)
不規則動詞	ku-ru → ko-rareru (来る→来られる)、su-ru → deki-ru (する→できる)

可能形を使った例文を挙げます。

(19) 花子さんは漢字が書けます。

ru 動詞可能形の、いわゆるラ抜きことば「見れる」「食べれる」などは、初級の段階では導入しません。

6.6 使役形の作り方

使役形 (causative form) は、u 動詞の場合、語尾の -u を -a に変えて -seru をつけます。ru 動詞の場合、語幹に saseru をつけます。不規則動詞「来る」は「来させる」、「する」は「させる」になります。使役形もすべて ru 動詞になります。

(20) 使役形の作り方

u 動詞 ik-u → ik-aseru (行く → 行かせる)、yar-u → yar-aseru (やる → やらせる)

ru 動詞 mi-ru → mi-saseru (見る → 見させる)、ki-ru → ki-saseru (着る → 着させる)

不規則動詞 ku-ru → ko-saseru (来る → 来させる)、su-ru → sa-seru (する → させる)

使役形を使った例文を挙げます。

(21) 猫にえさを食べさせました。

6.7 受身形の作り方

受身形 (passive form) は、u 動詞と「する」の場合、使役形の -seru を -teru に変え、ru 動詞と「来る」の場合、-saseru を -sateru に変えます。受身形もすべて ru 動詞になります。

(22) 受身形の作り方

	使役形	受身形
u 動詞	ik-aseru	ik-ateru
する	sa-seru	sa-teru
ru 動詞	mi-saseru	mi-rateru
来る	ko-saseru	ko-rateru

英語では、「be 動詞 + 過去分詞」で受動態 (受身 passive voice) を表します。

(23) John was hit by Jane. (ジョンはジェーンによってぶたれた。)

受動態 (23) には、対応する能動態 (active voice) があります。

(24) Jane hit John. (ジェーンはジョンをぶった。)

能動態 (24) の目的語 John が受動態 (23) の主語になっています。(23) のように、対応する能動態がある受動態を直接受動態 (直接受身 direct passive) といいます。その意味を考えると、主語が他の関係者によって直接影響をこうむるからです。たとえば (23) の場合、ジョンはジェーンにぶたれたてたんこぶを作ったりします。

日本語でも、(25) の受動態は対応する能動態 (26) があるので、直接受身

です。

(25) 太郎は花子にぶたれた。

(26) 花子は太郎をぶった。

能動態 (26) の目的語「太郎」が受動態 (25) の主語になります。日本語には、もう一つ、次のような受身があります。

(27) 太郎は雨に降られた。

(28) 母親は赤ちゃんに泣かれた。

(29) 花子は子供に死なれた。

これらの受身には、対応する能動態がありません。

(30) *雨が太郎を降った。

(31) *赤ちゃんは母親を泣いた。

(32) *子供は花子を死んだ。

(27)、(28)、(29) のような受身は、(25) と違って、主語が直接でなく間接的に何らかの影響をこうむるので、間接受動態 (間接受身 indirect passive) といいます。この受身には、迷惑をこうむるという意味合いもありますので、迷惑受身 (adversative passive) ともいいます。

では、次の能動態の受身文を考えてみましょう。

(33) だろぼうがお金を盗みました。

一つは、次の (34) です。

(34) お金がだろぼうに盗まれました。

能動態 (33) の目的語「お金」が主語になっていますので、これは直接受身です。能動態 (33) の受身にはもう一つ次の (35) もあります。

(35) だろぼうにお金を盗まれました。

これは迷惑のニュアンスを持つ迷惑受身です。

日本語教育では、まず直接受身を導入します。その際、動詞の受身形をフッシャーカードで練習し(「ぶつ」→「ぶたれる」などの機械的ドリルをする)、次に、能動態を受身に直させます(「花子は太郎をぶちました」→「太郎は花子にぶたれました」)。

迷惑受身は、たとえば「雨が降りました」を「雨に降られました」に直す練習をします。「降りました」を受身形「降られました」にするのは直接受

身と同じですが、さらに「が」を「に」に置き換えるのがポイントです。他動詞「盗む」などを含む動態(33)を(35)のような間接受身にする場合も、「どろぼうがお金を盗みました」を「どろぼうにお金を盗まれました」にします。この場合、「が」を「に」に変え、目的語「お金」はそのままで、「盗みました」を受身形にします。

6.8 使役・受身形の作り方

使役形はすべて ru 動詞ですので、**使役・受身形 (causative-passive form)** は、使役形の -ru を -rareru に変えることによつてできます。

(36) 使役・受身形の作り方

- ik-aseru → ik-ase-rareru (行かせる → 行かせられる)、
 mi-saseru → mi-sase-rareru (見させる → 見させられる)
 ko-saseru → ko-sase-rareru (来させる → 来させられる)
 sa-seru → sa-se-rareru (させる → させられる)

例を挙げましょう。

- (37) 学生は先生に本を読ませられました。
 (38) 学生は先生に学校へ来させられました。

u 動詞の場合、「行かせられる」「行かされる」、「やらせられる」が「やらされる」になるなど、単純化されます。一方 ru 動詞と不規則動詞には単純化が起こりません。この u 動詞の単純化は、(36)の規則に反しますので、初級の段階では導入しません。使役・受身形が確実に定着したあとに導入します。

6.9 テンス

テンス(時制)とは、動詞によつて表される時間で、現在・過去・未来があります。日本語では、状態を表す形容詞・動詞の現在形と、動作を表す動詞の現在形では、テンスに違いが現れます。まず、状態を表す形容詞・動詞の現在形は現在の状態を表します。

- (39) 教室は寒い。
 (40) 机の上に本がある。

一方、動作を表す動詞の現在形は未来の動作を表します。

- (41) きょうは太郎が家に来る。
 (42) 花子に手紙を書く。
 過去形はすべて過去の状態・動作を表します。
 (43) 教室は寒かった。
 (44) 花子に手紙を書いた。

6.10 アスペクト

アスペクト(相)とは、動詞によつて表される動作やできごとが、一定の時点においてどのようなようすであるかを表す文法手段です。一定の時点ですら、テンス(現在・過去・未来)とは無関係です。アスペクトには、完了・非完了、開始・継続(進行)・終了、反復、結果などがあります。

たとえば、「動詞+ている」の形で、次のようなアスペクトを表します。

(45) 「動詞+ている」のアスペクト

- 継続 走っている 書いている 歌っている 笑っている 降っている
 結果 消えている ついている 倒れている 開いている しまっている
 反復 行っている 勤めている

たとえば「走っている」は、ある時点で走る動作が継続(進行)していますので、継続のアスペクトを表します。一方「(電気が)消えている」は、誰かが電気を消した結果の状態を表すので、結果のアスペクトといます。ここで、「~ている」とともに継続のアスペクトを表す「走る」「書く」などの動詞は、動作の継続を表すので**継続動詞**といます。一方、「~ている」とも結果のアスペクトを表す「消える」「開く」などの動詞は、動作が瞬間的に終わるので**瞬間動詞**といます。つまり、「継続動詞+ている」は継続のアスペクト、「瞬間動詞+ている」は結果のアスペクトを表します。「(学校に)行っている」「(会社に)勤めている」は毎日の習慣を表し、同じことを繰り返すので**反復のアスペクト**といます。

その他、動詞に「~てしまう」をつけると完了のアスペクト、「~はじめ

る」をつけるを開始のアスペクト、「～終わる」をつけるを終了のアスペクトを表すことができます。

6.11 やりもらい動詞

日本語教育では、「あげる」「やる」(「やる」)[「もらう」][「くれる」]とその敬語形「しあげる」「いただく」「くださる」をやりもらい動詞といます。「あげる」「やる」は英語の give に対応し、「あげる」は動作主と同等の人にもものをおあげるときに、「やる」は動作主よりも目下の人や動物などにもものをおあげるときに使います。

(46) 友だちにプレゼントをあげました。

(47) 犬にえさをやりました。

(48) 花に水をやりました。

「もらう」は英語の receive に対応します。

(49) 友だちにプレゼントをもらいました。

「くれる」も英語の give に対応しますので、英語圏学習者にとっては「あげる(give)」と「くれる(give)」の区別がつけにくくなります。この場合、「あげる」の動作主は話者で、プレゼントは話者から他の人に移動するのに対し、「くれる」の動作主は話者以外の人で、プレゼントは話者以外の人から話者に移動することを教えます。

(46) 友だちにプレゼントをあげました。(動作主は話者。プレゼントは「話者→友だち」)

(50) 友だちがプレゼントをくれました。(動作主は友だち。プレゼントは「友だち→話者」)

「あげる」と「くれる」の混同が起こらないようにするには、「あげる」と「もらう」の練習をしてから「あげる」と「くれる」の練習に入ることが必要です。実際に現場で教えた方法を以下に示します。まず、教師がプレゼントの箱を使って一人二役をします。

教師 これ、プレゼントです。つまらないものですが、どうぞ。

教師 (向きを180度変えて) どうもありがとうございます。

次に、学生 A にプレゼントの箱を渡し、同じやり取りをしてもらいます。

ア 学生 A これ、プレゼントです。つまらないものですが、どうぞ(学生 B に箱を渡す)。

イ 学生 B どうもありがとうございます。

次に、学生 A に「A さんは何をしましたか」と聞き、次のように答えさせます。

学生 A B さんにプレゼントをあげました。(クラス全員でリポート(CL RP))

さらに、学生 B に「B さんはどうですか」と聞き、次のように答えさせます。

学生 B A さんにプレゼントをもらいました。(CL RP)

ここで、学生全員にペンを持たせ、教師と同じ動作をつけて次のように言わせます。

教師 友だちに(to)ペンをあげました(ペンが自分から友だちに行く動作) (CL RP)

教師 友だちに(from)ペンをもらいました(ペンが友だちから自分に来る動作) (CL RP)

動作をまじえて言わせることで、二つの「に」を区別することができます。

次に、学生 C と D にも上記ア、イと同じやり取りをさせ、さらに「あげる」「もらう」を使って言わせた後、学生 D には、さらに「くれる」を使って次のように言わせます(「C さんが～」をキュー(きっかけ、ヒント)として言うとスムーズに次の文が出てきます)。

学生 D C さんがプレゼントをくれました。(CL RP)

ここでまた、学生全員にペンを持たせ、教師と同じ動作をつけて次のように言わせます。

教師 友だちにペンをあげました(ペンが自分から友だちに行く動作) (CL RP)

教師 友だちがペンをくれました(ペンが友だちから自分に来る動作) (CL RP)

動作をまじえて言わせることで、二つの give 「あげる」(I gave something to someone.) と「くれる」(Someone gave me something.) を区別することができます。

次に、「さしあげる」「いただく」「くださる」は、教師と学生とのプレゼントのやり取りで教えます。まず、学生 E にプレゼントの箱を渡し、「私は先生です。私にプレゼントを下さい」と言って、次を言わせます。

学生 E これ、プレゼントです。つまらないものですが、どうぞ。教師は「どうもありがとう」と言ってプレゼントをもらい、「E さんは何をしましたか」と聞き、次を言わせます(プレゼントの箱を学生から教師に動かしながら)。

学生 E 先生にプレゼントをさしあげました。CL RP (箱は CL から教師に動かす)

さらに、学生 F にも同じやり取りをしたあと、次を言わせます(プレゼントの箱を教師から学生に動かしながら)。

学生 F 先生にプレゼントをいただきました。CL RP (箱は教師から CL に動かす)

最後に、学生 G にもプレゼントをあげ、次を言わせます(「先生が～」をキューにする)。

学生 G 先生がプレゼントをくださいました。CL RP (箱は教師から CL に動かす)

このようにして六つのやりもらい動詞が定着したら、次にそのテ形の練習に入ります。

7. おわりに

英語のリスニングで、一つの単語がわからなかったばかりに、途中から全く聞き取れなくなってしまった経験を持つ人は少なからずいると思います。日本語を教えるときも、学習者の知らない単語を使って説明したらどうなるでしょう。日本語を外国語として学ぶ学習者の立場に立って教えることは、日本語教師として大切なことです。

日本語を教えていると、外国人から日本語について思わぬ質問を受けることがあります。練習問題にもそのいくつかを紹介しましたので、考えてみましょう。